

## 国際ワークショップ

# 知識人と自由——キルギスにおける公共圏をめぐって

日程：2007年2月17日（土）

場所：国土舘大学世田谷校舎 中央図書館 AV ホール

ツルスノワ・サルタナート

（キルギス国立民族大学 国際教育プログラム総合インスティテュート（IIMOP） 学長）

### ‘The Scientific Intelligentsia and Development of Society in Kyrgyzstan’

キルギスは中央アジアの南東の位置にあり、さまざまな国と国境を接する多民族国家です。91年にソ連邦が崩壊するまで、70年以上その共和国のひとつでありました。現在は大統領制と議会民主制の国であり、公用語はキルギス語、第二がロシア語です。この国は美しい山々や川など、見事な自然を誇っております。首都のビシュケクにキルギス最古の大学、キルギス民族大学があり、その中でも国際教育プログラム総合インスティテュート（IIMOP）に私はおります。このインスティテュートの東洋学部には日本研究専攻もありますが、キルギスにおいて日本の文化伝統、言語慣習に対する関心はとても高いものです。独立して16年、キルギスはこれから独自の発展へのスタートラインにあり、その意味でも日本は大きな意味を持っています。したがって本年で5年を迎える国土舘大学との学術協定は、非常に意義深いものなのです。学生の行き来だけでなく、本日のようなかたちでの学術交流は、大変に貴重なものです。その点においても感謝申し上げます。

知識人、インテリゲンチヤとは、ロシアで19世紀に使われた言葉ですが、その意味は、高い教養を持ち、深い精神性を持った知識労働に従事する人たちのことだと私は考えています。文化や教育、学術に携わり、高い道徳性を持っている。このように捉えた場合、知識人というのは社会において最も進歩的な人々であり、社会の経済的、連帯的な部分において、非常に大きな意味を持つ人々であるといえるのではないのでしょうか。歴史を振り返ってみると、社会においてさまざまな矛盾が発生する時期に、社会はたびたびこの知識人の問題というものに直面してきたわけです。社会は大きな問題、また困難な時期に差しかかるたび、教養人の問題、知識人の問題について考えることになりました。そのことにより、危機からの突破口を見出そうとしたのです。これは正しいと思います。なぜかと申しますと、高い教養と道徳を持った人以外、だれが社会を危機的状況から救うことができるのでしょうか。私たちは、このたび、知識人というテーマについて、今までの研究とは別のアプローチから考えてみたいと思っております。具体的には、通常ソ連知識人の形成というかたちでの捉え方がなされることが多いのですが、それに加えてソ連以前の豊かな知識人の歴史と独立後の状況を取り上げるという、今までの研究では話されてこなかった点を加えながら、お話したいと思います。

1917年の10月革命を経て70年以上にわたりソ連邦の一員であったキルギスでは、伝統的にも知識人をソ連と関連したかたちでとらえてきました。識字率の低かった1920年代、ソ連政府はキルギスに知識層を確立するという非常に重要な課題を背負っておりました。新社会主義的な知識人層の確立においては、3つの方法が考えられていました。革命以前の専門家を活用すること。農民や労働者階級から頭脳労働者を育成すること。そして、高等教育機関や中学高校を卒業したもののなかから専門家を育成

することです。キルギスには革命前からの専門家は存在しておりませんでしたので、一番目のパターンというのは当てはまりません。したがってまず、農民や労働者から、さまざまな企業やソ連の共産党の組織の中で、多く人材が育成されました。またキルギス人の教師の育成も重要課題でした。1925年にはキルギス教育大学が設立されたのを皮切りに、新しい大学や教育機関もつぎつぎ設立され、またレニングラードなどから多くの専門家が派遣され、キルギスタンの人材育成に携わりました。ほかにも、第二次世界大戦中にロシアやウクライナにあった教育機関の移転などがあり、キルギスにおける知識層は急速に発展しました。

しかしながら私は、知識人というのは、ただ単に教育を受けた人という意味だけではないと思っています。知識人と呼ばれるためには、ほかに高い道徳性をもたなくてはならないのです。キルギスにおける知識人の歴史という問題にアプローチするにあたり、より問題を掘り下げるために、ここでは三つの歴史的段階についてお話をさせていただきたいと思います。

ひとつは、キルギス民族そのものの歴史のはじまりに関連しています。キルギス人というのは遊牧民族であり、したがって優れた空間感覚、地理や天文学についての非常に高度な知識を持っていました。太陽暦や独自の医学、軍事的な技術、社会構造に対するシステムティックなアプローチもありました。キルギスの歴史的叙事詩マナスのなかには、世界の地図を示す図が数千も含まれています。

学術の発展の第二段階は、遊牧から定住へと生活が変化したことに起因すると思います。10世紀に入ると霊廟を建設するという伝統が生まれるとともに、それに関する知識や技術、とくに数学が発展しました。また、イスラム教が導入されると、学術の中心はイスラム寺院になります。そこでは神学のほかに、天文学や医学などさまざまな分野について学ぶことができました。ということは、国の指導者や社会のリーダーは、高い教養を身につけていたのです。とくに19世紀後半には学術におけるエリート層が確立していたようです。

20世紀からは、キルギスが国家として成立したこともあり、第三段階といえるでしょう。ここでは、それまでに培われた学術的なポテンシャル、高等教育システムと専門教育、そしてロシアからの多大な援助といった点が非常に重要になってきます。特に農民や労働者層から知識人を養成することで、新しい知識層が形成されていきます。10月革命後、キルギスにはソ連科学アカデミー支所ができ、後年、キルギス科学アカデミーが設立されました。

こんにち、キルギスには名実ともに、学術分野における知識人層が確立したといえると思いますが、はじめキルギスには13名のアカデミー会員と14名のアカデミー準会員がいただけで、多くは渡来したロシア人でありました。現在は、多くの博士や準博士取得者、学術・技術に携わるスタッフがおります。また、研究分野には、化学や医学から社会学までいろいろあります。1995年以降に研究員数が急激に減ったのですが、それはこの時期の共和国の経済的な理由に起因し、また、91年92年のソ連邦の崩壊にも関係しています。ソ連時代、キルギスタンでは、国の財政の30%~33%はソ連の中央政権の援助でまかなわれていました。学術というものは、いつの時代も国の予算からの支援があるものなのですが、これらの収入がなくなってしまったことによりキルギスの研究者は経済的に苦しい状況におかれることになりました。近年は、多くの学生を抱える身としてはうれしいことに、学術に対する興味が高まり、修士課程への進学率も上がっています。とくに若者が商業に走り、学問をないがしろにしていた91年前後の数年間と比べると、非常に嬉しいことです。私自身に対しても、96年ごろは学問をすることはそれほど意味がないと説得されたような時期もありました。今となつては、その意見も翻され、多くの先生方の教育への見解は楽観的なものであります。私自身も、キルギスの将来をより明るいものにしていくために、学術の発展が今後さらに発展することを、確信してやみません。